慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石渡貞雄著 農業恐慌論
Sub Title	
Author	常盤, 政治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.770(68)- 773(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0068
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

識と非近代的な意識との混在が、われわれの現實の姿であるならば、中國革命の歴史はわれわれに何を教えるであろうか。（岩波新書上（一九三頁）下（二〇五頁）各百圓、一九五二年オーストラリア）

（1）スメドレーの「偉大なる道―朱德の生涯」は「世界」に連載されている。（飯田　鼎）

石渡貞雄著
「農業恐慌論」

「農産物價格論序説」においては「觀念的生産力説」をもつて日本における農産物價格形成の低さを特徴づけ、「林業地代論」においては林業資本の回轉の無類の長期性に着目して獨特の「林業地代法則」を展開する（これに對する批判は、拙稿「林業地代論の一考察」本誌四六卷三號、鶴嶋雪嶺氏「林業地代論の一考察」京大經濟論叢第七十二卷第六號をみよ）といつた具合に、農業經濟學上の未開拓の分野に、進んで開拓の斧をふるつてこられた石渡貞雄氏は、最近健筆とみに冴え、一九五二年の「林業地代論」以來、一九五三年「農業恐慌論」、一九五四年「農地改革の基本構造」と年々力作をものされている。いづれも新見解を學界にとうたものであるが、ここにとり上げようとする「農業恐慌論」は、從來の農業恐慌理論の批判的檢討の上に理論的體系化を試みた野心的勞作で、わが國における體系的農業恐慌論のおそらくは最初のものであろう。氏によれば、「農業恐慌のこんにちの理解は、まず一般恐慌理論を正しく把握し、それが獨占資本結成によつてどう歪曲されるか、さらに資本主義の一般的危機のまたその激化の段階でどう歪曲されてゆくかをまずみ、その上で農業恐慌が資本主義のいかなる段階にあらわれ、またあらわれねばならぬかをみ、そこで一般的恐慌理論との同一性と差別性を具體的な資本主義の段階での恐慌歪曲性とからみあわせて攝取することである」（一三頁）。かかる觀點から、「第二章恐慌の理論的把握（一）」において《商品に統一されている矛盾》から説き起して、一般恐慌論を展開し、第三章においては獨占資本主義の段階における恐慌のあらわれ方の特徴を分析する、という準備的手續をとつた後に、第四章から主題の農業恐慌論に入る。

そこでは、まず「雜多な恐慌の種類」を整理し農業恐慌の範疇を定めることによつて「農業恐慌の基本的位置」が措定される。氏によれば、農業恐慌は「(1)、經濟の基礎部面＝下部構造としての生産部門の恐慌……であり、(2)、かつ農業としての生産局面での恐慌」（一七九頁）として把握される。そして、「農業恐慌理論にとつて必要な第一點は、舊來の農業恐慌理論の吟味自體である」（一八〇頁）となして、農業恐慌の「特殊性」を説く點において「今日まで完全に市民權をもつていた」ところの「農業恐慌に對する二人の權威ヴァルガとリヤシチェンコ」（一八二頁）が、理論的のみならず農業恐慌史的に吟味された後に、石渡氏獨自の農業恐慌論が披歴されるのである。

氏の農業恐慌論の特徴は、嚴密な意味での農業恐慌と嚴密な意味でない農業恐慌＝農業恐慌現象とを區別しようとするとこにある。氏は曰う。「恐慌は生産の社會的性質（社會化）と領有の私的・資本家的様式との間の矛盾が、實現においてあらわれたものである。したがつて、恐慌は資本家的經營を前提とする。農業も又そうでなければならない。農業恐慌は、農業の不均等的な遲歩性がようやく資本家的經營にまで發展し、資本家的經濟圈が支配的に農業をまで編入し擴大された下で、資本主義的生産の社會化と領有の私的様式との間の經濟的矛盾が實現においてあらわれた、そこでの農業局面でしかない。換言すれば、農業も生産の社會化（社會的分業だけでない）をまつてはじめて農業恐慌となるのである。これが嚴密な意味の農業恐慌生起の基礎である」（二八四頁）。

以上によつて明らかな如く、石渡氏によれば嚴密な意味での農業恐慌は、農業における資本家的經營が支配的となつているところでなければ決して起り得ないものなのである。從つて日本の農業のように資本家的經營が支配的でないところでは農業恐慌現象は起つても、嚴密な意味での農業恐慌は起り得ない。「農業は、この場合工業恐慌の波及としてだけであり轉化しただけとして恐慌現象をおこすにすぎない。なぜなら、農業が恐慌をおこす生産力と生産關係の矛盾自體をもつていないからである」（二八五頁）という。それ故に、このような見解からは、アメリカやイギリスのように農業それ自體に資本家的經營が支配的に存在しているところでないかぎり、農業恐慌は絶對に起り得ないということとなる。ところで、日本には農業恐慌が嘗てなかつたとか、あるいは決して起り得ないなどと言つたら、一笑に附されてしまうであろう。そこで石渡氏は、《農業恐慌は最初から世界農業恐慌であつた》と主張するのである。というのは、先の農業恐慌の規定からすれば一國民經濟の場合には後進國例へば日本には農業恐慌は起り得ないことになるが、世界農業ということにすればそこには資本家的農業の支配的でない國の農業もインクルードされることになり、アメリカの如き農業恐慌が直接恐慌を輸出するないし恐慌を再分配する形で多くの資本主義國の農業恐慌を惹起させる」（二九四頁）と説明することによつて、資本家的農業の支配的でない國にも農業恐慌現象ではなく農業恐慌の生起することを論理づけることが、一應できるからである。だが、工業恐慌から波及した「農業恐慌」が農業自體に恐慌を生起せしめる要因がないということから、それを農業恐慌現象ではあつても農業恐慌ではないとする論理からすれば、アメリカの農業恐慌から波及して起る後進國の「農業恐慌」も、それが「波及したもの」であるかぎり後進國の農業自體に恐慌生起の基礎がないのであるから、アメリカにとつては農業恐慌であつても、資本家的農業が支配的になつていない後進國にとつては農業恐慌ではあり得ない筈ではなかろうか？　しかるに石渡氏は《農業恐慌は最初から世界農業恐慌であつた》と強調することによつて後進國にも嚴密な意味での農業恐慌の起りうることを論理づけようとするのである。曰く。「アメリカ經濟に集中的に釀成されている恐慌的矛盾が他の資本主義のそれをふくみつつ、資本主義經濟世界のアメリカ主導の再編成によつて、非常に歪曲され迂回されて恐慌をヨーロッパ諸國にひきおこすのである。農業恐慌において特に、それは強くあらわれている。一見するとその農業恐慌は、……多くの場合ただ不當にある農産物が單なる小農國から輸入されて過剰化したものにすぎない如くみえる。即ち生産の社會化と領有の私的・資本家的様式との間の矛盾が、そこには見當らぬもののようにみえるであろう。その限り正しくは、農業恐慌現象ではあれ、農業恐慌ではあり得ないことになる。果してそうか。否。そうみえるのは、局部的にみるからである。世界市場に對應しているアメリカ農業の持つ資本主義的矛盾が、決定的に小農國を支配している限り、又迂回的に歪曲して右の如き農業恐慌をおし出している限り、それは正しく農業恐慌である」（二九六頁）と。日本の農業恐慌についても、「これも一見すると東南アジアの非資本家的農民の米が、日本の食糧過剰をひきおこしただけのととで、正しい意味での農業恐慌ではない如くである。

しかし、本來は、資本家的農業としてのアメリカ農業恐慌の日本への直接輸出が、世界政治によつて歪曲され迂回されて日本に到達されたものである。その意味で、日本の農業恐慌はアメリカ農業の一環に編入されたそこでの農業恐慌を本質とし、…それによつてわが國の非資本家的農業に一般化されたものである」（二九七―八頁）から、形態的にみれば農業恐慌現象のようにみえるが本質的には農業恐慌なのだというのである。

だが、「農業恐慌は、農業の資本主義化による資本主義經濟部門の擴大化と農業の特殊性（歪曲性）においてあらわれる恐慌の農業部面での把握であつて、決して別個の農業恐慌が工業恐慌に對してあるということなのではない」（二七〇頁）とするならば、アメリカの農業恐慌もアメリカの國民經濟全體の全般的過剩生産恐慌の一構成部分にすぎない。と同樣に、たとえ農業部門においては未だ資本家的經營が支配的となつていない後進國においても、その國の經濟が全體として資本主義的經濟法則に支配されていて農業もその國民經濟の再生産にとつて不可缺の構成部分となつているかぎり、その國民經濟に恐慌がおこれば必然的に農業恐慌も起らなければならない筈なのである。農業恐慌が起り得るか否かは農業部門に資本家的經營が支配的に成立しているか否かではなく、農業が資本主義經濟の一構成部分であるか否か、農業勞働が資本主義經濟における社會的總勞働の可除部分として意味を有しているか否かにあるのである。卽ち農業が社會的分業として意味を有しているか否かに存するのである。かく言へば石渡氏は、それは「生産の社會化と私的分業ないし社會的分業を混同するものである」（二八四頁）というであろう。だが、生産の社會的性格とはなによりもまず、社會的分業のことである。しかし、この社會的分業が確立されるのは資本制生産樣式が支配的となつたときである。歷史的範疇としての小商品生産の段階においても社會的分業がみられるのであるが、それは未だ部分的であり、それら小商品生産者達を支配しているものは生んがための消費經濟＝自給自足經濟であり、唯彼らの餘剩生産物のみが商品となり、その範圍においてのみ社會的分業がみられるにすぎないのであつて、社會的分業は確立していないのである。私的分業の社會的確立は資本制生産樣式の支配的な段階をまたなければならないのであるが、資本制生産樣式が支配的となれば必然的に生産手段の集積・集中が行われて、「紡車や手織機や鍛冶屋の鎚にかわつて、紡績機械や機械織機や蒸氣ハンマーがあらわれ、……そして生産手段の場合と同樣に、生産そのものも、一連の個人的操業から一種の社會的生産物に轉化し、また生産物は、個々人の生産物から社會的生産物に轉化し……それ以來工場からでてきた紡糸や織物や金屬製品は多數の勞働者の共同の生産物」（エンゲルス「反デューリング論」）となるのである。それ故に、このような生産手段の集積・集中、勞働過程の社會化は確立した社會的分業の生産力的內實であり、生産の社會的性格を生産力視點からみたものにすぎない。しかるに石渡氏は、生産の社會的性格についてこのような生産力視點からみた生産の社會化を力說しようとすることのあまり、單純商品生産における社會的分業は生産の社會化ではないかのように考えられ、生産力視點からみた生産の社會化が存在しない農業には、農業恐慌は起り得ないと斷ずるのである。これは一般恐慌論における恐慌の必然の問題と、一般恐慌論の具體化または深化としての農業恐慌論とを混同するものである。恐慌の必然性は資本制生産樣式の確立をまつてはじめて與えられるという一般恐慌論の命題がそのまま農業恐慌論において公式的にあてはめられているのである。

また、《農業恐慌は最初から世界農業恐慌であつた》ということによつて、小農民經濟をその再生産構造の一構成部分となしている後進資本主義國にも「嚴密な意味での農業恐慌」の起り得ることを論證しようとしているのは石渡氏の國際的市場價値の成立を認める立場（「農産物價格論序說」二二〇頁以下參照）に深く根ざしているのかもしれないが、恐慌は先づ資本制的國民經濟の再生産構造のなかで把握されなければならない。それを基礎としてはじめて、ヨリ具體的に世界市場との關聯で、國際的視野から世界市場恐慌がとらえられうるのである。さもなければ「恐慌の輸出」ということもナンセンスとなつてしまうであろう。農業恐慌が世界農業恐慌としてとらえられなければならないとすれば、それは世界市場への參加者としての資本制的國民經濟における恐慌の農業部門における發現として把握されなければならないためであつて、農業恐慌と農業恐慌現象とを區別しようとするスコラ的農業恐慌論の論證のためであつてはならなかつたのである。（一九五三年七月理論社刊B6版、三〇七頁、定價三二〇圓）

なお、本書については既に大內力氏の書評（經濟評論昭和二十八年十月號）があることを附記する。（常盤　政治）

第四十七卷　第六號目次

中世リューネブルク井鹽の取引について……高村象平
南北戰爭・再建期における勞働運動（二）……川田壽

資料

絹織業に於ける生産形態の發展と賃勞働の形成過程……野口祐
林業史研究（二）
――森林組合の性格とその成果について――……金丸平八
最近のソ連鐵道の現狀と政策……加藤寬

紹介

ドゥ・ルーヴァ著
「フロレンスの一織物會社」……渡邊國廣

書評

E・H・カー著
「浪漫的亡命者たち」……飯田鼎

論文紹介

經濟學關係文獻目錄